

葬送儀礼をめぐる二・三の問題考察

和田 謙 寿

一

知識人の間に葬式無用論の狼煙があがり、世間の脚光を浴びたのはついに先頃の話であった。彼らは葬式をすることの無用を主張したのではなく、無意味な、虚栄的な葬式についてを指摘批判したのである。冠婚葬祭は人生における重要な立場にあり、それだけに世間においては事大主義にとられる傾向が強かった。近世以降、何度となく為政者たちは儉約令を出し、庶民の驕りを戒しめたが、その効は空しかった。もっとも葬送の儀は冠婚葬祭の中でとくに意義深いものであり、古来より崇祖の念の強かったわが国においては当然なことであった。冠婚葬祭は当人を内在したところの通過儀礼であるのに対して、葬儀は当人が不在の儀礼である。しかも葬儀はこれをもって人間社会との永別の儀式でもあり、それだけに、ついつい大げさに行われる趨勢にあった。実際に行われ

ている現在の葬儀を見てもいざれかというに世相の潮流に巻き込まれている現状である。葬儀そのものが自己本位に片寄って、死の持つ本来の姿と衆生済度の面とを忘却して、仏教の真の見解をおろそかにしている感もある。そこで、古来よりの葬儀に関するしきたりの真意を葬送習俗の中より考察し、ふとすると小手先の片鱗的にとられ易い因習的な問題を、とくに総合的な面より把握してみたい。元来日本における仏教習俗の多くは、わが国古来の民間信仰と舶来的仏教との習合によるものであった。更にその内面を分析すると中国的な色彩がことのほか強く影響している。とくに儒教の教えは家族制度や日常生活・宗教生活を通して江戸時代以降深く社会に浸透し、葬送行事に対する習俗の中にも内在した。家庭生活において礼の重きを説いた儒教は、家における父子・夫婦・兄弟の道を、更に郷における長幼・賓主・朋友の道、邦国王朝の礼による君臣の関係に至るまでの道を説き……生

より死に至るまでの生活軌範としての礼の重要性を述べた。「家族を中心とする儀礼の問題点。」かかる思想がわが国に伝わり、たとえ時代が変り家族制の薄らいだ現代といえども、葬送を通したしきたりの中にはなお、連綿として受けつがれている。現在行われている葬送の儀礼は、古来より行われていた周到なる葬送儀礼の断面の連続であるが、たとえ時代の変化が如何にあらうとも、礼制のうち一番大切なものとして扱われてきたものであった。葬送の儀が人間をして真に無常を知らしむる機会であり、仏道に精進させる大切な場であるとしたならば、われわれは真剣にこの問題にとり組み、この真意を考究すべきである。その手はじめとして先ず、葬送の行列を中心として、葬送の習俗の中にあらわれた深い「なぞ」を説き明かして行きたいと思う。

二

葬送の儀は死後行われるものではなく、実際には死の直前より行われるのが常であった。原始民族、または古来においてのしきたりの中に、この風習は時折見受けられた。かつて台湾の蕃人の間では病人が息を引取る間際になると、地上に蕃布を敷いて病人をこれに移し、準ずる死者の扱いにしたといわれている。また、他の部族では「村の長（酋長）がこの病人の命はもたぬと判断するや、室外の床に移してしまつた

という。」そこに、葬送準備の第一歩が始まるのである。若しも病人が快方に向いて、屋敷に入ろうとすると大変な目に会い、「いぶり殺されてしまう場合もあったといわれている」。日本においても「長い病気で回復の見込のない病人が危篤状態になった場合。」または「癌などの如く不治の病にかかり、病状が悪化し回復の見込のない病人が危篤状態に入った場合。」には、親戚縁者が医師の言葉によって一同に集められ、同時に他室では葬式の準備がすすめられる。現在では葬儀屋という専門職があり、常日頃から葬式道具一切を用意しているために、強いて死の直前より準備する必要はない。昔日においては葬儀屋は都会地を除いては殆んどなく、死講や無常講などの血縁者や隣組の共同体によってなされた。しぜん、臨終より葬式の第一歩が実施されるようになってきたのである。臨終の行事として先ず第一に思い出されるものは「末期の水」に関する行事である。末期の水に関するしきたりは、一般に無意識のうちに各処において行われている習俗であるが、この由来は松浦秀光氏「禅家の葬法と追善供養の研究」によれば、遠く印度においても行われていたとして、長阿含遊行経の例を引用せられている。つまり

「人の臨終時に、少量の水を以て口を潤すを末期の水という。これ釈尊入滅に水を求め鬼神上る古事に拠る。」として、長阿含遊行経（AD411-413）『仏、阿難に命じ「吾渴せり

水を飲まんと欲す、汝水を取り来れ」と。阿難仏に白して言わく、「向に五百乗の車あり、上流において水を渡りて濁り未だ清からず、以て足は洗うべきも飲むに中らざるなり」と。是の如く三たび阿難に勅す汝水を取り来れと。阿難仏に白して言わく「今拘孫河は此を去ること遠からず、清冷にして飲む可く、亦澡浴すべし」と。時に鬼神ありて雪山に居在し、篤く仏道を信ず。即ち鉢を以て、八種浄水を盛り世尊に奉す。仏、彼を慰むが故に尋で為に之を受けて、云々と。

内容は多少物語的ではあるが、日本で俗にいう「末期の水」にちなんだ説話である。日本においても末期の水に関する考察をなした人は幾人かある。著名なものとしては民間伝承や日本民俗学の書中に修められているが、とくに、井之口章次氏と木村博氏の意見を参考としてみることにしよう。先にも述べたように、われわれの身のまわりで行われる習俗の成立にはいろいろな形態がある。普通一般としては習俗が発生するや否や、その地域から他地域にかけて必要に応じて移動伝播する場合である。しかし他方、生活上の必需品として誰からも要求せられるものは、往々にして各処で生み出される場合が多く、出現地・出現時の甲乙をつけかねる場合もある。死者を弔う葬式の儀式も、部族共通の祝いである婚礼の儀式も、またここでいう末期の水の場合もかかる性格を持つ

ものである。「末期の水」の場合、疲れ果てた人間の生命が、死との斗争に破れ、体力気力とも次第に弱まり、食物も殆んど咽喉を通らず流動物でさえも飲み込めなくなる。顔色は見ると影もなく、無意識状態になり死を待つのみである。ガーゼや綿にひたした少量の水を唇にそえてやると、雛鳥の如くしきりに口をそりながら水を要求する。病状が深くコップなどで飲む力もないし、だからといって無理に飲ませたら機能の衰えた気管に水が詰って窒息死してしまう。付添の者にとっても一番印象深いさびしい一時期である。木村博氏によれば、このような一番印象的な「生との別れのひととき」が、どうして葬送儀礼の核心とならないのか、つまり、「末期の水」に関する研究業績の報告例が如何にして少ないかということを指摘されている。葬送儀礼に関する大部分の行事は参加者の少しでも多いことが、故人やその家族に対する最も喜ばしきものとされてきた。しかるに「末期の水」の際には家族を中心とした近親者の間でなされ、しかも病人に対して少しでも平静さを与えるために立会人数の制限も余儀なくされたのである。ときも時として居合わす者の心境にも、ただならぬものがあるのであろう。われわれは「末期の水」の第一歩の意義をよく踏みしめべく、次の問題にふれてみよう。つまり末期の水に関する概念の考察である。この習俗が印度・中国・日本にあるならば、これを比較してみることも必

要なことである。1 病人が苦しみの中より水を乞い願う。それに応えて周囲の（看病）肉親の者がガーゼや綿にふくませた少量の水を与える。人情の然らしむるところであろう。ときによっては病人自らが特定の水を指示する場合もあった。また周囲の人たちが気をきかせて、かねてより病人の欲していた特定の場所の水を与えることもあったであろう。前者の如く、当人の希望によって求められたところの水を「願水」または「乞水」「望み水」などと呼んでいる。信心の深い肉親をもった場合には、理趣文を挙げた功德の水を寺院よりもらって供せられるときもある。2 「死水をとる」という言葉がある。木村博氏によれば死水は、臨終の時に行う地方もあれば、死後の直後に行うところもあるといわれている。いずれにしても、「死水をとる」「死水をとらぬ」という言葉は、古来においては家督相続の問題と直接・間接のうちに関連したところの重要な意義を持っていた。人間生活に大いに意義のある水のことであるから、死後の行事の中に関連性のあることは当然なることであろう。水に恵まれた地方、水に不自由な地方、それぞれの立場においてそれなりのもつ役割があったのである。そこに関連性のある問題として、灌水・洒水、つまり死者への供養としての水の問題が生ずる。むかしから「水と靈魂」との関連性には深いものがあった。沐浴と水・若水と水・墓参と水、これに関する信仰習

俗も割に多い。沐浴は日本的にいえば湯灌に相当するものであるが、死体を入棺するに先立って湯をもって浴させしめる行持である。中国印度と共にその起源は至って古く、春官の大祝の条に、「大喪に始めて崩ずれば以てつらぬ鬻して尸をあらふ。」とあり、礼記中にはこれに關することが種々述べられている。「紙銭をもって水を神から買ってそれで沐浴させる習俗」これはかつて中国各地に行われた習俗であるといわれている。俗に買水とよばれた習俗である。デ・ホロートは「中国宗教制度」中において、買水を廈門では「乞水」といわれていたことを指摘している。「中国古代の葬礼と文学」において西岡弘氏はこの沐浴こそは、「死者の汚れをとり除くのみならず、古代における沐浴の祓除避邪の遺意をもっていると考えられる。」と述べ、かかる水が、河神や水神から求めたものにせよ、古来中国で「靈力ある水」としてあがめ用いられた香草・香酒などの場合と同様、この水に浴することによって死者の靈をよみがえらせ、または、靈よりの邪悪を防ぐためのものとして考えられていたようである。4 墓参と水、つまり「死者に対しての供養としての水」の考察である。このしきたりも至って古く、納骨時に行われる散水の習俗故事について、歴史的に相当さかのぼることができる。（AD701年）唐、義浄訳、無常経付録臨終方決中（松浦秀光氏、前載）にも「無虫の水を亡者の上に灑ぐ。ま

た黄土を亡者の上に散ずること三七遍」また、(AD1103年)宗蹟撰、禅苑清規卷第七、亡僧の項にも、「骨を収め普同塔に入れ、あるいは水を内に散ず。」と述べられている。更に仏教行持書の中にも、しばしば、「三供」「五供」などの語句のもとに、供養として散水の義が述べられている。散水の方法にも種々あり、ひしゃくで墓塔にかける場合もあれば、楨や櫛・杉葉などに水を浸してふりかける場合もある。方法は異なれど、灑水の本来の姿は帰一するものと思われる。死者の靈膳や墓塔の面前にコップに入れられた水を見かけることがある。それに対してはそれぞれの人により見方も異なるであろう。霊と水との間には何か不可分の関係があることは確かである。

三

中国と日本の葬送儀礼の中には常に招魂復魄と祓除避邪の両面が宿されていた。葬送をめぐる習俗の中にもこれに関連した諸行事が秘められていたのである。つまり、身体より遊離した靈魂を何らかの方法によって呼びもどし蘇生させることと、すでに死の世界に趣いた穢靈邪霊を如何にして避けるかということであった。あるときには銅紙銭のもとに買水の習俗を行い、時には魂呼ばりの儀をもした。啼哭（泣人）・音楽・読経・繞匝・買路銭・六道銭・頭陀袋などの習俗や作

法、みな前記の目的を達するためのものであった。葬列の中にも同様な事を察することができた。死と同時に展開される葬送習俗のほとんどは、日常生活の反対の習俗が強いて決行された。故人の着物の縫い方から着かせ方、衣類のかけ方から沐浴の仕方、出棺から葬送の行列、ことごとく皆然りであった。とくに古来厳格な家庭においては、死者には明衣を着せ、法式にかなった受戒の作法まで行われた。時代の降るにつれてかかる習俗も簡易化されたが、まだまだ現在でも葬送儀礼の中に形式的に残されている。死者の額に付けられている三角布や葬祭壇に安置されている刃物や櫛などの事物は、著名なものの一つである。多くの人たちは葬礼を指して、百万億土の浄土に行くための儀式であると見ている。もちろんそれに違いないが、個々の問題を考察して行くと了解に苦しむものがある。これは日本古来の風習と印度・中国を通して伝来された信仰習俗の習俗によるものと、各地の持つ地域性、歴史性によって醸し出された習俗が、有形・無形のうちに取り入れられ、結合されたことによるからである。時代の變遷により葬送儀礼をはじめとして、それに関連のある習俗に大きな変移を示した。そこには葬送儀礼に対する形式主義化、経済の高度生長に伴う社会的変化（多忙化）物質主義中心の合理的な考え方、家族制度の変化など、種々なる条件が加わって現代的な気風をあらわした。死後、先ずはじめに

行われべき寺院への知らせも、むかしは二人で走ったものであるが、現在では一人で行く者もいる。

元来、「告人」(つげつと)は「二人使い」「飛脚」などとも呼ばれ、魔より逃れ任務を全うするためには、必ず二人して寺院に行くことを常とした。都会地においては殆んど葬儀の仕事は葬儀屋にまかせ、寺院は読経をする程度となった。世間では礼という点をとくに重んぜぬ限り電話連絡で用を足すようになったのである。しかし地方によっては告人として従来の二人の単位より、三―四人の人たちによって共に寺院へ訪ずれるようになった場合もある。ここに甲府地方における告人に関する報告を掲げてみよう。

『まず、死者があると近所の人たちが菩提寺に伝えに来るが、この時、甲府においては葬式の内容、つまり、「葬式を何人の僧侶でするのか」とか、「戒名はどうするのか」とか「お寺にどの位布施をしたらよいのか」などと。主に金額をきめにくる。布施の金額をはっきり決めていくということ、は、信仰心のうすい地方なので、むこうに委せておくと布施の金額がまちまちになるので、ある程度の額を教えるという意味で行われたものであると思われる。信仰心のうすい地方における寺の経済を考えた先人たちの生活の知恵といえよう。従って「告人」は二人で行くという習慣よりも、その相談のために三四人で行く場合が多い。』

この一節によるだけでも、如何に時代の影響が習俗に及ぼすかということがわかるであろう。かつては華やかに行われた葬送の行列も、一部の地域を除いては簡易化されつつある。これは決して信仰や経済事情ばかりによるものではなく、最近の交通事情などによる影響も大きい。時代の要求としてのスピード化と葬儀の単純化、簡略化も今後益々進むことであろう。それにしても真に葬送の意義を探究するためには、簡素化されぬ田舎部の葬列よりひと目でみることが必要であろう。一口に葬列といっても、地域・故人の社会的地位・子供縁者の社会的地位とその親交状況などによって多少の差異はあるも、関東では、1 松明(たいまつ) 2 高張提灯 3 花籠 4 大旒 5 弔旗 6 花環 その他の贈物 7 僧侶 8 霊牌(位牌) 9 霊膳 10 遺物 11 笠・杖 12 膳の綱 13 霊籠 14 天蓋 15 親族 16 一般会葬者 の順であり、岐阜地方においては 1 松明(たいまつ) 2 寺案内・提灯 3 大幡 4 僧侶 5 位牌 6 御霊前 7 香炉 8 四ツ花 9 蓮華 10 燭台 11 菓子 12 団子 13 生花 14 四幡 15 燈籠 16 杖 17 輿または籠 18 天蓋 19 燈籠 20 四幡 21 花籠 22 親族 23 一般会葬者 などの順となっている。ところによって、葬列に先だち、墓地にいらっている役を、先松明(さきたいまつ・「のぼて」ともいう。)・道案内・魔払い・清めの火、を持っていく風習も残っている。これが著名なる階級層

の葬送の儀ともなると、行列次第の役割は一段と色彩を増す。ただし、その基本的な葬列内容においては、庶民的な場合と何ら異なるところはない。全国的に普遍化した葬送行列習俗のうち、特色のあるものを掲げると、まず、松明の場合を挙げることができる。葬送儀礼、とくに葬列と松明との関連性は中国古代をはじめとして、遠くローマやギリシャの当時に際しても行われていたといわれている。もちろんこれより見るに、松明は仏教のみのものではなく、キリスト教や回教など、他宗教圏内においても用いられたものである。位置的にも行列の最先端を中心とした場合が多く、その任務は霊が墓に至る道に迷わざるよう用いられたもの、つまり、道案内・道明しのためだとせられている。「中国宗教制度・第二章」中にはとくにこの点に注目し、「照尸」（死体を照明する）のもとに、「中国では太古より自然を陰陽に二大別し、陰と陽は宇宙の根本力を有するもので、前者の陰は暗黒・寒冷・死の根源を、後者の陽は、光・熱・生命の意を所持している。」といわれている。燈火により、家人が悪の力をさえぎらなかつたならば、肉体から離れた霊魂は陰的立場のもとに白星でも暗黒な見えざる領域のとりことなり、毎日の霊への献げ物の功德も不可能となるといわれている。かかる意味から陽の本源としての松明が必要となってくるのである。他面、人間の重要な霊魂は陽を中心とした根源をもって構成

せられているといわれ、人間が死を伴った場合には霊魂が肉体から分離したため極度に弱っている。そこで近親者は人工的に小さな陽をつくり、霊魂を強めてやるのである。つまり、ローソクや燈火、松明などの光と熱によって無事霊魂を護ることになるというのである。中華民国やマレーシア、ベトナムなどにおける華僑の葬列を見ると、時折雄雞の参加（縛りつけてある。）するのが認められる。これも前述同様、弱れる霊魂を強くするために雄雞をもってそれを補うのである。いはば絶命にのぞんでの枕元へのローソクや燈火。葬列の提灯・松明の場合と同義に用いられているのである。日本において葬送の紙花などに白色の造鳩を認められるが、これも中国の雄雞の説話と相通ずるものと考えられる。日本においても、葬送行列と松明とは不二の関係にある。位置的にも葬列の先頭に立つのが通例であるが、葬列の出発前に、墓地に先行するものや、葬列の中に位するものもある。目的としての意義は道案内や魔払い、清めなどの場合が多いとせられ、中国の考え方とほぼ一致している。もちろん松明といっても、その制作過程は種々雑多で、昔日においてはおそらく本物の松明を用いた場合も数多くあったのであろうが、現在では藁束を利用したり、カヤを束ねてみたり、または箒状のものを代用したり、紙をもつてつくり火の部分に赤紙で覆ってみたりしている場合のものが多し。松明に変わり、同義的

に使用せられるものとして提灯や木製の灯籠を用いられる場合もある。中国においては両者が併用せられることもあるが、その目的としては同様である。わが国においてもかつての中国の場合と同様に、松明と提灯とを共に併用している場合が多い。地方により松明を火ボテ・野ボテの名称のもとに使用せられているところもあるが、井之口章次氏によれば、ホテは藁で作られた箒状のもので、松明と結果的に共通的なものであらうと述べられている。(井之口章次氏・仏教以前・野辺送りの項) いずれの場合も松明を持ち歩く者は分家においては本家の長老役が、本家においては一番古い分家の主人がといった具合に、葬送儀礼の配役としてはとくに重要な者が参加することになっている。それだけに松明の持つ意義は重且つ大なるものがある。ここで注意を要することは、松明と提灯との相関関係である。松明に関する考え方は中国的なものと日本的なものとの両者共通する点もあるが、中国の場合には多少儒教的な思想面が加味されている。習俗そのものの内容は中国的な考え方の流入よりも、むしろ、日本の醸し出されたもののように感じられる。松明と提灯とは目的面で同意義に認められる点が多いけれども、松明が退化して提灯の利用となるという考え方には危険な点があると思う。古代中国においての葬列参加提灯の正面には官職名と氏名とが記され、中にローソクによって点火されているのが通

例であった。白昼に点火することは当を得ぬことと感じられるが、暗黒界に住んでいるところの霊を正しく埋葬の場案内するためのものだといわれ、また、提灯に文字を書くのは途中で会うか知れぬ他の提灯に、霊が迷うことなくすごされるようにとの意味であるといわれている。(前載・中国宗教制度) もちろんこれは有産階級者の場合のことであるが、日本においても、葬列の前部に位置する提灯の場合、(高張提灯)などに、高貴の家庭においては家紋を入れたものを見かけることができた。(日常武家間に用いられるものや役人の間に用いられた提灯にも家紋役柄の印紋が認められたが、)これは封建時代における葬儀家の威光をかりた紹介であるとも考えられる。魔払いとしての松明・道案内としての松明の役割・葬送儀礼としての行列には当然なくてはならぬものである。もっとも、鎌倉時代以降に行われた著名者の葬儀は夕刻から夜間が常であったといわれるから、実用的な意味からして、照明としての「あかり」が必要であったのであり、今ここでいろいろな解釈を与えた問題内容は、その多くが庶民間に語り継がれた私見の大集成であったのかも知れない。長阿含遊行経(AD421-413)後秦(松浦秀光氏前載引用)には、「双樹間において、香華伎楽を以て、舍利を供養し訖って七日已り、時に日暮に向う。仏舍利を挙げて天冠寺に到るとあり、江戸期の国学者角田忠行は葬事略記においては、

「葬送は夜中なるべし、云々」と述べられている。最近でも岐阜県武儀郡付近では、「夏の葬儀は午後四―五時頃、冬の場合は午後二―三時頃から始められる。」というから、葬儀の終了時間は、夕刻にわたるものと考えられる。日本各地の山村部では夕刻にかけて終了するところが割にあったのではなからうか。近隣の武家、または著名家の間に行われた葬送儀礼。とくに外部にあらわれる葬列の習俗は、一般庶民の間にも見られるところである。他方、盛大な儀式を万民に披露せんとするのは人情の常である。かかる施主の一段と強き心境も手伝い、その伝播力も偉大なるものとして発展していったであろう。利用されるところは異なるも、松明と禅宗の葬送儀礼における炬火との関係も一環したものとして忘れてはならない。中国には古来より道案内を司る者として「開路神」―（生きた人間を被い役として用いられたことが開路神の起源だといわれている。）―があり、葬列を飾るといわれている。一般には竹と紙をもってつくられた恐ろしい赤色の像である。この開路神の像を先頭に立てることによって、有害なる力は鎮圧され悪鬼は隠れ、進行中の霊を保障することができるといわれている。（中国宗教制度・第一巻―埋葬―）この風習は華僑の居住するところ一円に行われている習俗である。

四

葬送儀礼、とくに葬列が 1 死者をして百万億土の浄土へ旅させるためのものであるならば、…… 2 年老いた者が遠い仏の国に行くためのものならば、…… 3 死によって弱められたところの霊魂が一人で遠い旅路に行かねばならぬものならば、…… そこには当然、それを助けるための杖の必要性が生じてくることであろう。葬送儀礼の中には、割に杖の参加する場合が多い。この場合の杖の用途は、葬列に関するものと、棺中に納められるものとの二つがある。さらに、葬列に参加の場合、どのような方法で如何なる人を中心として参加するか、ということが問題となる。元来、杖に関する伝説・説話は意外に多く、外国における魔法の杖をはじめとして、孕み棒・弘法の杖など、更には、多少趣きは変るが、錫杖・禅杖・金剛杖などの如く種々なるものとして利用せられている。その持つ役割の多くが、実用的な杖としての利用以外、霊的なもの、護身的なもの、仏教的なものとして使用せられている。葬列に参加する場合にも何か実用的以外に、威力あるものとして使用せられていることも確かである。禅苑清規（宋）や諸回向清規（日本）などの中にも、葬送儀礼に杖の関係を有していたことがしるされている。中国では死者家の入口に杖を置くことによって、喪を表彰したことが古代

において示されている。葬そのものが故人（または主人）の代理とみなされることもあり、また、権威の象徴でもあった。昔日の中国では、親の葬送儀礼に、息子たちが重病その他の悪条件により、どうしても参列出来ぬ場合に、人をして喪服一揃と喪杖とを届けさせ、自己の参列に変えさせたといわれたが、これらの習俗によっても、杖のもつ多目的意義が察せられる。日本では杖を人間の変身として考えられた場合もあった。病人で葬送儀礼に参加出来ぬ人のために代理の人が杖をついて参加したり、時には草履をもって杖と同様な役割を果たすこともあった。むかし、菩提寺へ死亡の知らせに行くときは二人で行くのを常としたが、止むを得ず一人して行く場合には杖をついたり、草履をふところに入れたりして、二人の立場のもとで行ったのだといわれている。日本で用いられた葬送用の杖の場合、どのような材料のものが多く使用せられたのであろうか。また、一般に使用せられたものと、葬送用のものとは、どんな関係にあったものであろうか。普通、棺内におさめられたものは、故人が生前使用したものが多くいようである。（老人の場合）しかし葬列に加わる場合のものには必ずそうとは限らなかった。むしろ、お役目的な非現実的なものが多かった。材料も地域的に手っとり早く入手しやすい桑の棒や、ウツギ、梅の子枝、細竹などの如きものを使用する場合が多かった。むかしは鬼を制するといわれる桃の

木をもって杖とした例があったと聞かされたが、これは特殊な場合であった。多くは手もとを紙で巻き、親戚の者や子供（孫）たちが用いたといわれている。行列に参加した杖は棺桶と共に地中に埋められる場合もあったが、その多くは埋葬後土盛をした上に突き挿されるものが常であった。井之口章次氏（前載―孫杖の項）は仏教以前において、「葬列に加わった孫杖の結末は、この息つき竹に接続するものであり、きわめて自然に息つき竹としての理解に根拠を与えている。」と述べられているが、長い間の民間信仰風習と崇祖感情との一致が、かかる習俗を構成維持させたのであろう。更に、「葬送の行列の中に、土地毎の重要さの程度により一様ではないが、群馬県下仁田村付近のタツガシラは、竜頭とはいいながらも、青竹の先に小さな焦茶色の作り物を取りつけてあるだけで、杖と異なるところがないし、五島の小値賀島唐見崎などのロクドウも、竹の杖に提燈……元はローソクをつけただけのものであって全くの杖であると。埴輪円筒と埴輪人形との関連性の如く、杖を基盤としての多目的な信仰発展の一例として、竜頭の場合を掲げておられる。葬送行列や仏教習俗の中には竜と関連した習俗が割に多く見られる。何といっても本場中国においては更にこの感が強い。日本での葬列と竜との関連性には計り難い点があるも、中国よりの流入によることは確かなことであろう。この竜をとり入れた葬送習

俗は雄雞の場合と同様、マレイシア、タイ、ベトナムなど、華僑の住む仏教地帯には等しく行われている風習である。元来、竜は架空の靈獣といわれているが、「雲や水を自在に生ぜしめる竜の能力により、最大の祝福である作物を發育せしめて、食物を衣服・富を与える肥沃なる雨が、死者をとり囲むことになり、死者はこの祝福を利用して墓の中から子孫に分配することができると、中国的な考え方にはあるが、竜に関するものとして、その加護を祈っている。かような死者にまでも影響を与え得るといふ竜の靈力が、日本においても受け入れられたのであろう。中国において葬送習俗の中にとり入れられたその他の動物も日本に受け入れられ、伝説化している。その中の主なるものとしては、虎や猫などがあげられている。「中国宗教制度」の第二章の中に、『最後の息を引き取るや否や、飼猫全部を隣家に移すこと、少くとも、猫を縛っておいて、納棺が済むまでは家の中にいれないことに、家人は大いに気をつける。事實は、猫を動けなくしておかないと、猫は死者の床上を跳ね越したり、歩いたりするのであろうし、その時は直ちに死体が起き上るといふのである。この時死体を旧位置に押さえ付けるには長い棒が必要であり、又投げ付ける物として家具の一つが用いられるのだが、箒が一番目的に適っている。即ち、箒の柄は両手で握むのに甚だ好都合であるので、激怒興奮した死体も、箒を直ちに握

んで己が胸に押し付けて、それで激怒を冷まし、この激しい動作で旧の無力な状態に戻るといふのである。……中国人によると、虎はその尾に不思議な毛を持っていて、動けず無感覺になった人の体に靈魂を戻す力がこの毛にあるという。この毛は俗間に「還魂毛」（魂を帰らせる毛）と呼ばれている。ところで虎が人を山間に銜え込むと、先ず人の周囲と上にその尾を振り廻わすのを忘れないのは、この不幸な被害者が蘇生して、もう一度死の苦悶に逢う時に、愚にも衣服を掻き毟るから、虎が彼を喰べる時に、厄介な布片や糸がなくて好都合である。と虎が経験から知っているためであると。更に又、猫はその外観のみならず、特徴・態度・習性までも虎に酷似していることを、中国人はよく知っている。それ故に、かかる小型の虎も「還魂毛」を持っていて、水床上に跳び上って死体を危険なる悪鬼に変えることも、容易に起り得ることではないか。いわゆる「寅の日」に猫が死体に触れると、特に危険である。この日には猫族の勢力が他の日よりも優勢と信じられているからである。』（清水金二郎・萩野目博道氏訳）と、述べられ、わが国における「日本靈異記」や「徒然草の猫股」に似通う説話のあることがしのばれる。猫と死体に関する妖怪談は室町から江戸時代にかけて世間を謳歌した。江戸時代中期以降にかけては、テンマルや火車などの死体を背景とした想像上の妖怪談が流行し、猫に関する説

話の場合と同様に恐れられ、やがてそれが実在の狐や狸・むじな・などと共に混同されるに至った。ただ、葬列の中に化け猫やテンマルがあらわれ、葬送を妨害したり、死体をさらったりしたという説話は、江戸時代の伝説としてしばしば聞かれるところであり、これを中心とした「切紙」の秘法も現

在残されている。葬列の中に魔を払うための習俗が多分に残されているといわれるが、これらの魔をとり払おうという意味の中には、猫魔に対する問題も欠かすことができない。葬送習俗への念仏や祈祷・弓矢の参加・箒や刃物などの存在も、いずれも皆、かかる問題に対処するためのものである。